

問題の所在

児童は、日常生活の中で家の手伝いや仕事を体験することが少なくなっている。さらに、家庭生活を無意識に過ごしがちで、生活の課題に気付くことが少ないように感じられる。このような状況で、児童が家族の一員として、生活をよりよくしようとする意欲や態度を身に付けていくことは難しい。

これまでの実践では、家庭科のねらいである実践的な態度の育成を目指して指導を行ってきた。しかし、自らの手で作る喜びを味わうことができる調理実習や被服製作には興味・関心を示すが、教師から指示されたとおりに調理したり製作したりすることで満足してしまっている児童が多い。その理由として、自分の生活に役立てたいという思いや願いをもたせたり、自ら考え工夫して取り組ませたりする活動が十分になされていないことが挙げられる。

これらのことから、生活の中から課題を見付け、その解決のために自分なりに工夫する能力を育てることによって、実践的な態度につながる学習を展開する必要があると考える。

そこで、本研究では、「生活に役立つ物の製作」の指導を通して、生活を創意工夫する能力を育てることを目指した学習活動や教師の支援を工夫し、その有効性について探ることとした。

研究の方法

生活を創意工夫する能力に関する文献研究をもとにして、「生活に役立つ物の製作」の指導計画を作成する。そして授業実践を行い、生活を創意工夫する能力にかかわる児童の変容を分析・考察する。

研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

？ 「生活を創意工夫する能力」について

評価の観点の一つである「生活を創意工夫する能力」の趣旨は、「家庭生活について見直し、身近な生活の課題を見付け、その解決を目指して考え自分なりに工夫する。」となっている。このことから、生活を創意工夫する能力とは、家庭生活を自分なりに少しでもよくするために思考・判断したり、行動したりする能力であるととらえることができる。

？ 「生活を創意工夫する能力」が育つ学習過程

児童は何もかも用意された生活に不便さや技能の必要感を感じにくくなっている。また、衣食住に関する技能的なことも、機械化され、自らの手でじっくり取り組むことも少なくなっている。このような状況から家庭生活を自分なりに少しでもよくするために思考・判断したり、行動したりする能力を意図的に育てる必要があると考える。そこで、生活を創意工夫する能力を育てることを目指した学習の構造について、図1のようにまとめてみた。

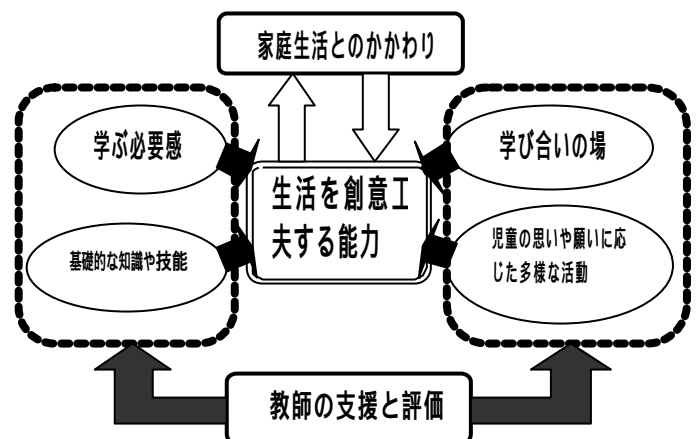


図1 生活を創意工夫する能力が育つ学習構造

児童一人一人に学ぶ必要感をもたせ、課題を解決させるために必要な基礎的な知識や技能を身に付けさせることができるよう、教師は支援していく必要がある。また、ともに学び合える場を設定したり、児童の思いや願いに応じた多様な活動を仕組んだりしていくことで、児童は自分の課題の解決を目指して創意工夫していくと考える。また、学習指導要領では家庭生活に関心をもたせることが重視されており、生活を見つめ直させることにより、自分なりの課題を見つけさせる必要がある。常に家庭での自分とのかかわりをもたせ、身に付いた能力が家庭生活に生かされていくことが大切である。

2 実践授業の指導計画の作成と実施

(1) 題材について

ア 題材 布を使って作ろう

イ ねらい

- 生活に役立つ物を布を用いて製作することに、関心もち、製作物を具体的に構想し、製作計画を立てることができる。
- 目的に応じた簡単な縫い方を考えたり、自分なりに工夫したりすることができる。
- 製作する楽しさや、活用する喜びを味わうことができる。

(2) 指導計画の作成において工夫したこと

ア 問題解決的な学習段階

児童自らが考え、工夫し、思考・判断し、行動していくためには、問題解決的な学習を仕組む必要がある。そこで、課題を「つかむ」段階、課題を解決する方法を「考える」段階、考えた方法で「やってみる」段階、学んだことを家庭生活に「生かす」段階を考えた。

イ 教師の支援と評価の工夫

以下に示すとおり、支援と評価を考えた。

学ぶ必要感をもたせる工夫(？)

児童が生活を見つめ、生活の課題に気付くことができるように体験的な活動を行う。

基礎的な知識や技能の習得(？)

基礎的な知識や技能の習得を目指して学習できるようにワークシートや学習形態などを工夫する。

多様な活動の設定(？)

児童の考え、思い、願いを共感的に受け止め、課題を解決していく方法を多様に設定する。

学び合いの場の設定(？)

自分のよさや友達が工夫しているところに気付くことができるように学び合いの場を設定する。製作時のグループは、製作物が似た者同士で編成する。

評価の工夫(？)

個に応じた適切なアドバイスやアイデアに対する賞賛や他の児童への紹介などの評価を行う。また、児童が「工夫している」場面は多々あるので、見逃さないように、評価を計画的に行う。授業では、本時のねらいに対する評価場面を設定し、児童を見取る活動を効率よく行うようにする。

？ 指導計画の作成と実施

これまでの研究を踏まえ、指導計画を表1のとおり全12時間で作成した。

表1 指導計画

段階	時	学習活動	評価の観点 (生活を創意工夫する能力)	教師の支援
つかむ	1	生活を見つめよう ・ロールプレイングで生活の一場面を再現し、気付いたことを話し合う ・生活に役立つ物を生活の中から見付け、その便利さや機能性を話し合う ・自分の生活を見つめ、生活を工夫したり、よりよくしたりすることを考える。	・家庭生活には、創意工夫して生活を豊かにするものがあることに気付く。 ・生活の場面や使う目的に応じて物の材質や機能を使い分けていることに気付く。 ・自分の生活の中で、工夫したり、よりよくしたりすることを考えることができる。	・様々な生活のしかたに気付かせ、生活に役立つ物を意識させる。？ ・体験的な活動を取り入れ、生活に役立つ物を使って、生活を便利にしたり、楽しい雰囲気をつくりたいという願いをもたせるようにする。？ ・自分の生活を振り返ることができるようなワークシートを用意する。？
	2	ミシンを使ってみよう ・ミシンの使い方を調べる。 ・ミシンの基礎的な技能を習得する。	・ミシンを正しく、安全に扱うことを考えている。	・ミシンの基礎的な技能が確実に身に付いたことが分かるようなワークシートを用意する。？
考える	3	布を使って作る物を考えよう ・参考作品を見て、布で作る意義や作り方を考える。 ・布を用いて製作する物を考える。 ・試し作りや調べ学習を通して、形や大きさを考える。	・作りたい物を試しに作ってみたり、段階標本で作り方を調べたりすることができる。 ・使う目的に応じた形や大きさを考え、工夫することができる。	・参考作品から、布の製作に関する基礎的な知識に気付かせる。？ ・作りたい物のイメージが膨らむように標本や提示を工夫する。？ ・多様な試し学習ができるよう、材料や方法を工夫する。？
	4	製作計画を立てよう ・製作のめあてをもつ。 ・縫う手順や製作方法を考える。 ・自分なりの工夫をする。	・作りたい物を具体的に構想することができる。 ・製作計画を考える際、自分なりの工夫を取り入れることができる。	・製作計画表を工夫し、自分の課題や縫い方の工夫を記録しながら学習を進めることができるようにする。？ ・工夫を認め、製作意欲を高める。？
やってみる	1	製作しよう ・布にしろしをつけ、縫う。 ・目的に応じて縫い方を工夫する。 ・時間内にできるような時間配分を考えて製作をする。	・手縫いやミシン縫いを取り入れて、製作することができる。 ・縫う箇所に応じた縫い方を考え、工夫することができる。	・基礎的な技能を主体的に学習できるように提示を工夫する。？ ・児童同士が互いに教えあえるように学習形態を工夫する。？ ・技能のつまずきがある児童には個別に支援する。？
	2			
	3			
生かす	1	作品発表会をしよう ・一人一人の作品を発表し合い、自分のよさや友達が工夫しているところに気付く。 ・自分の学習を振り返り、生活に活用する意欲をもつ。	・製作した物をどのように工夫したかを発表できる。 ・友達が工夫したところに気付くことができる。	・友達との交流を通して、自分のよさを友達に認められる満足感をもたせ、互いの成長を喜び合うような場を設定する。？ ？

授業実践は、広島市立A小学校5年B組33名を対

象に平成13年11月から平成14年1月にかけて実施した。

3 授業実践の結果の分析・考察

授業実践は、学級全体の活動とグループ活動を組み合わせて行った。「考える」段階の第3時からは、製作物が似ている者同士で、五つのグループを編成した。各グループの人数と製作物を表2に示す。

児童の活動の様子・つぶやき・振り返りカードの記述等から、生活を創意工夫する能力がどのように育っているか、またそれぞれの場面で学習活動の工夫や教師の支援や評価がどのように有効であったかを分析・考察することにした。

表2 グループ構成と製作物

編成したグループ	人数	具体的な製作する物
手さげ・かばん	5人	裁縫道具袋・ショルダーバック・手さげ
巾着	4人	弁当包み・野球のミット入れ・ティッシュケースカバー・ポケットつき手さげ
クッション	7人	正方形型クッション・長方形型クッション
ナップザック	10人	ポケットつきナップザック・ふたつきナップザック
ウォールポケット	7人	ゲームのカセット入れ・新聞入れ・プリント入れ

ナップザックグループは、作業時に2グループに分かれた。

「つかむ」段階の分析・考察

「つかむ」段階では、学級全体の活動だったので、表3のとおり学級全体について分析・考察した。

表3 「つかむ」段階(学級全体)

凡例：「 」つぶやき、『 』記述、 教師の支援に関する考察

段階	時	児童の活動の様子・つぶやき・記述 等	分析・考察	支援
つかむ	1	生活を再現した劇では、立候補した児童が役割演技をした。見ている児童たちは身を乗り出すようにして見ていた。 「うちは、手作りするところと、そうでないところと半々ぐらいかな。」 生活の部屋で、六つのコーナーを設け、生活でよく使われている物を展示し、それらを見たり触ったりする体験的活動を行った。 『はじめてみたものがいっぱいありました。』 『べんりなものがたくさんたくさんあった。こんなものがそえば楽ちんです。』	のように生活を見つめるきっかけ作りに、二人の登場人物の持ち物に注目させ、生活のスタイルの違いに気付かせようとしたことは有効であった。役割演技をした児童が生き生きと演じたので、大変楽しい雰囲気の中で授業が始められた。は劇を見た後のつぶやきである。生活の中には、いろいろな物があるが、手作りしたり買ってきた物を利用したりしていることに気付いたようだ。しかし、どんな物があるかと問うと、なかなか思い出せない児童が多かった。そこで、のように、実際に食卓や出かける時や、整理整頓に使っている物を見たり触ったりする活動を取り入れた。 ～ はその活動の後の記述である。初めて見たものに対する驚きを書いた や、生活で使う物があると便利だと気付いた は、家庭生活への関心をもつことができています。 は、教師がそれぞれの物がどのように工夫しているのかを見つつけようという声かけに対して、工夫という視点でものを見つめることができたと考え。	?
	2時	『今日見つけてみると、いろいろなことがあるんだなあと思いましたが。』 『自分の生活を見直したいです。生活に役立つ物を自分の家や部屋などでさがしたいです。』 「私の家ではティッシュケースを箱のままでおいているけど、カバーがあったら、ほこりがつかなくていい。」 「私は透明なウォールポケットがあったらいい。中身が見えるので、何が入っているかすぐわかるから。」 「ばくはナップザックがあったらいい。せおうんだったら自転車に乗るとき便利だから。」	は、自分の生活を振り返り、自分の家庭にも生活に役立つ物はあるのではないかと思い、もっと知りたいという意欲が出ている。～ は、自分の生活にあったらいいと思う物を発言したものである。 は、自分の家ではティッシュケースにカバーをしていないことに気づき、生活の課題としてとらえている。 は、ビニル製の透明なウォールポケットの便利さに注目している。 は、自分が遊びに行く時にナップザックがあったら、生活が楽しくなるし、背負うことで便利でもあると思っている。このように、一人一人が自分の生活に合わせて、必要なもの、あったらいいものや便利なものを意識することができた。	?

生活を再現した劇を演じたり見たりする体験的な活動を通して、様々な生活のしかたに気付かせることはできた。しかし、自分自身はどんな生活をしているのか、どんなものを使って生活をしているのかを考えさせることは十分にできなかった。このことから、児童は、自分の生活を改めて見つめ直すという経験が少ないので、自分自身を振り返ることができにくいように思われる。

そこで、実際に生活で使われている物を見たり触ったりする体験的な活動を行い、家庭生活には創意

庭生活を改めて見つめ直し、自分なりの課題をもつことができた。

以上のことから、「つかむ」段階で、生活場面を想起させたり家庭生活への関心をもたせたりする体験的な活動を行ったことは有効であったと考える。

「考える」「やってみる」段階の分析・考察

「考える」「やってみる」段階は、グループ活動が主だったので、巾着グループの中からA児とB児を取り上げ、表4のとおり分析・考察した。A児は自分から進んで考えたり工夫したりすることができる。

表4 「考える」「やってみる」段階(巾着グループ) 凡例: 「 」つばやき, 『 』記述, 下線部 教師の支援に関する考察

段階	時	児童の活動の様子・つばやき・記述 等		分析・考察	支援
		A 児(弁当包み)	B 児(野球のミット入れ)		
考 え る	3 ・ 4 時	自分の弁当箱を持ってきており,弁当箱の周りの長さをメジャーで測る。 弁当箱を紙で包んでおおよその大きさをつかむ。 物差しを使って,紙に製図をし,はさみで切る。 弁当箱を紙で包み,縫う所である袋のわきとひも通し口をホッチキスでとめる。 『いろいろ試してみても作ることがとても大変だった。』	野球のミットを持ってきているが,ミットの周りを測る様子はなく,メジャーで遊んでいる。 ミットを紙で包む。 下書きをしないで,大まかに紙を切る。 紙を切った後,「どうしたらいいかわかん。」と教師に言う。教師の説明を聞く。 『とくにない』	は作りたい物に関係あるものを持ってきた様子である。A児もB児も作りたい物がはっきりしていることが分かる。A児は で作る物の大きさを試行錯誤しながら決定することができているが,B児はミットをどのように包むのかを迷っていた。 の活動では,A児は正確に紙を切ることができたが,B児は大まかな切り方になった。 では,A児は弁当箱に合わせた試し作りを完成させるが,教師は袋にゆるみがないことを指摘する。B児には,1枚の紙を二つに折りわきをとじれば,袋状になることを説明する。 は振り返りカードの記述である。A児は,試行錯誤しながら試し作りの学習を進めたことが分かる。B児は自分から進んで学習できなかった。	?
	5 ・ 6 時	製作の手順を書くために教科書を開き,調べ始める。 教科書のナップザックの作り方を参考にして,弁当包みの作り方を決めている。 計画表を書き終わり,B児に自分の計画表を見せて書き方を説明する。 製作手順を図に表す時,布の大きさを試し作りより少し大きくする。ミシンで返し縫いを縫うところや手縫いで丈夫に縫うところにシールを貼った。 『寸法や長さやぬいかたを研究して楽しかった。』	製作計画表には完成予想図から書き始める。 席を立ち,教室の掲示を見たり作業している友達の周りをうろついたりする。計画表は完成予想図以外は何も書いていない。 A児の計画表を見て,A児が書いている通りに写し始める。 製作手順を図に表す時は,自分ひとりで作業する。布の大きさや工夫するところは明記していない。 『布で作るということはとてもむずかしいことを知った。』	は製作計画表を書き始めた様子である。A児は,製作の手順を教科書から調べるという方法を取り,自分から進んで自分の課題を解決していった。B児は,作る手順を考えあぐねていた。 は,班の中で,計画表を見せ合ったり相談し合ったりするように声かけをした後の様子である。B児は,A児と作りたい物が似ていることに気付き,A児の助言やアドバイスを受けて,計画表を書いた。 は製作手順を図に表す時の様子である。自分が工夫したいところにシールを貼るように設定していた。A児はミシンの返し縫いと,口あきの手縫いの2箇所シールを貼り,自分の工夫であるところを捉えている。B児は自分なりに完成までの図を描いたが,布の大きさや自分が工夫するところは明記していない。振り返りカードの記述 では,A児は工夫していく楽しさを感じているが,B児は製作に対する不安を感じている。	?
や っ て み る	1 ・ 2 ・ 3 時	計画通りに布にしるしをつけ布を裁断することができた。 ミシンの扱いに自信をもっているため,わきはミシン縫いをし,口あきは手縫いで何重にも返し縫いをしている。 「これだけ丈夫に縫えば大丈夫よね,先生。」と言って手縫いをしたところを見せに来る。 ひも通し口は計画ではミシン縫いをする予定だったが,手縫いに変えて縫い始める。 『最初のうちは,難しいと思っていたけど,順序が進むにつれて楽しくなってきた。作品は自分としてはいい出来ばえだと思います。布を使って自分の手縫いやミシンの技術が上がったと思います。』	作りたい物の大きさがはっきりしていなかったため,しるしつけや布の裁断に時間がかかる。 ミシンが苦手なので,同じ班の友達に援助してもらおう。ミシンで実際縫う時はまっすぐ縫っている。口あきの手縫いは教師に援助を求めてきた。 ミシンでひも通し口を縫い,ひもを通す。ひも通し口がせまかったので,ひもを通すのに苦労する。 『ぼくは最初から最後までちゃんとできたのでよかったです。みんなもとてもいい作品ができていました。みんなすごいなあと思いました。何よりも最後までできてよかったです。』	は布のしるしつけや裁断の様子である。B児は計画があいまいだったので,迷う時間の方が長く,とても手間どっていた。 は,縫う作業の様子である。A児はミシンや手縫いの技能に自信をもっているため,スムーズに作業が進んだ。口あきを手縫いした所を教師に見せに来た。袋のわき縫いがほどこけないくらい丈夫に縫っていることを教師は賞賛した。B児は,ミシンを苦手にしていないので,同じ班のA児や他の児童に助けをもらいながら作業した。ミシンを縫う時は,一人で慎重に縫っていた。B児が手縫いをする時は,教師が個別に指導した。 はひも通し口を縫う様子である。A児はキルティングの布で分厚いため,ミシンでは縫いにくい。手縫いの方が早くできると判断し,手縫いで縫い始めた。B児は手縫いを苦手としているので,ひも通し口をミシンで縫ったが,ひもの幅を考えずに縫ったため,ひもが通りにくい様子だった。 は,学習終了後に書かせた感想である。A児は自分の成長を振り返ることができている。自分なりに考え工夫する能力が育っている。また,物を作り上げる喜びを感じることができている。B児は,教師や友達の支援を受けることが多かったが,最後まであきらめずにがんばったことが自分の成長であると考えている。 はそれぞれの作品である。A児の作品は,ミシン縫いと手縫いを使い分け,ていねいに仕上がっている。作品としての完成度も高い。B児の作品は,計画より大きさが小さくなっている。ミシン縫いはしるし通りに縫っているが,手縫いは雑である。	?

工夫して生活を便利にしたり楽しくしたりするものがあるということに気付かせた。児童は,自分の家

B児は根気強く作業することが苦手で,自分から進んで学習に取り組むことが少ない。

A児は自分なりの課題を見付け,課題の解決を目指して試行錯誤しながら考え工夫していることが分かる。B児は,課題を解決する方法を見いだせなかったり技能のつまづきがあったりしたが,A児の助

ができるようになった。児童が自分の思いや願いをもち,試行錯誤しながら製作していく中で,創意工夫する能力を育んでいく姿を見取ることができた。

? 「生かす」段階の分析・考察

言や教師の支援を得て、作業の意味を一つずつとらえながら、自分なりに考えて学習を進めていくこと

「生かす」段階は、学級全体の活動であったため、表5のとおり学級全体の分析・考察をした。

表5 「生かす」段階(学級全体)

凡例：『 』記述，下線部 教師の支援に関する考察

u003c/divu003e

段階	時	児童の活動の様子・つづやき・記述 等	分析・考察	支援
生 か す	1 時	<p>作品発表会を行い、同じ班で、作品を交換し合い、評価カードに気付きを書いて相手に渡した。</p> <p>『すてきだね・グッドアイデアだね・すごいねカードがもらえてうれしかった。イニシャルを作ったところがよかったらしい。』</p> <p>『ともだちのいいところをみつけてカードをかきました。ほくもカードをいっぱいもらったのですごうれしかったです。』</p> <p>『ぼくはこの授業をして、すごくやってよかったし、楽しかったです。今度は曲がったぬいかたがないようにがんばりたいです。』</p> <p>他の班の作品も見て回り、友達の作品のよいところを見つけた。見終わった後、がんばった友達、技能的に優れた友達、アイデアがすばらしい友達、生活に役立つ便利な作品を製作した友達をそれぞれ発表した。</p>	<p>は、<u>評価の視点を4枚のカードにして、カードの交換をしあいながら互いのよいところを認め合えるようにした。4枚のカードの色を分けたのが効果的であった。</u> ~ は作品発表会終了後に書いた感想である。は、自分の作品のよさを認められたことが、自分の励みになっている。は、友達の良さに気付き友達とともに成長したことが分かる。は、自分の振り返りができている。<u>次への学習の課題にも気付いている様子</u>が分かる。他の児童も積極的に評価カードの交換をした。の活動の後の発表では、たくさんの友達の名前が挙がった。<u>作業をがんばっていた友達や、工夫して作っている友達を互いに認め合うことができた。</u>授業の最後に、教師が一時作品を預かりたいと言うと、ほとんどの児童が残念がった。作品に対する愛着やこだわりが生まれている様子<u>がうかがえた</u>。教師は、実際に作品を家庭に持ち帰ったら、しばらく使ってみて、その時の感想を書くことを知らせた。</p>	<p>?</p> <p>?</p> <p>?</p>

「生かす」段階では、製作する楽しさや作り上げた喜びを互いに味わうことができた。さらに、家庭に持ち帰り、一週間使ってみた感想を書かせた。下記は、その時の児童の記述である。

・遊びに行くとき、よごさないように大切にあつかった。とても軽くてもちやすかったし、肩にひもがくいこまなかったのがとてもよかった。(ナップザック)

・朝、新聞が来た時ポケットに新聞を入れて使った。ゆうびんや学校のおたよりも入れた。新聞を毎日探さなくてもよくなった。とても便利だった。(ウォールポケット)

・家庭科で、さいほう道具を持って帰る時に使った。今までさいほう道具の袋がなかったので、とても役に立ちました。ちょうどいいサイズだし、ポケットもちょうどよかったので、私の生活に役立つ、とてもいい作品だと思いました。(裁縫道具入れ)

児童は、自分の作った物が生活に役立っているという充実感を味わい、活用することで生活が楽しく豊かになることに気付いていることが分かる。また今度はどんなものを作りたいかという問いに対しては、今回作ったものより高度な技術を要するものを作りたいという答えが多かった。これらのことから、今回学習したことを家庭生活に生かしたり、次の学習へつなげたりしようとする意欲が育ったのではないかと考える。

今回の学習では、体験的な学習を取り入れたように学ぶ必要感をもたせる工夫をしたり、児童の思いを生かして課題を解決していく方法を多様に設定したりしたことが、生活を創意工夫する能力を高めることに有効に働いたと考える。また、教師が個に応じた適切なアドバイスや助言、声かけを行い、児童が工夫している姿を的確にとらえることも大変重要であることも確認できた。

研究のまとめ

本研究では、小学校家庭科において生活を創意工夫する能力を育てる指導法を「生活に役立つ物の製作」の指導を通して探った。その結果、次のような成果を得た。

「生活に役立つ物の製作」において、製作物を自ら考え、目的意識をもって製作できるよう学習活動を工夫することができた。

生活を創意工夫する能力を育てるための具体的な指導計画と教師の支援を示すことができた。

生活を創意工夫する能力を育てることを目指した指導法を実践し、その有効性を示すことができた。

しかし、一人一人が製作する物が違うため、課題を解決するための方法が多様にわたり、そのための準備に時間がかかることや、生活を創意工夫する能力を自分の家庭生活にどのように生かしたかは評価しにくいことが課題である。

今後は、他の題材においても、生活を創意工夫する能力を育てるための指導法や教師の支援方法について研究を深めていきたい。

参考文献

国立教育政策研究所教育課程研究センター
「評価規準、評価方法等の研究開発(中間整理)」
2001
文部省『小学校学習指導要領解説 家庭編』
開隆堂出版 1999

5

